

観光ロッジと地方選挙をめぐる地域住民のポリティクス

——ケニア南部のマサイ社会の事例——

平成 24 年 入学
派遣先国：ケニア
松隈 俊佑

キーワード：政治的活動，リーダーシップ，世代間の争い，出自集団，交渉

対象とする問題の概要

ケニア・タンザニア国境沿いのマサイの集団ランチにて、観光ロッジの利権、および集団ランチのリーダーシップをめぐる人びとの対立が起きている。

2009 年にリーダーシップを握った若者たちが、2000 年から稼働していた観光ロッジの利益を独占しようとして、結果的にはロッジを閉鎖に追い込んだ。その過程で自らのリーダーシップに法的な特権を付与し、また資金の横領を繰り返すなどしたため集団ランチの人びとに不満がつのっていった。

人びとの反感は 2013 年 3 月に行われたケニア大統領選挙・総選挙のキャンペーンと共に過熱化し、リーダーたちはさらにそれを利用したキャンペーンを展開した。この状況を見かねた長老グループは、コミュニティの問題を解決するため、出自（クラン）や世代にもとづく紐帯を利用しながら戦略をめぐるせた。

本研究では、この一連の事例を取り上げ、観光ロッジと地方選挙をめぐる人びとの政治的活動や駆け引きに焦点を当てる。

研究目的

アフリカ地域社会は植民地期から様々な要因によって多くの急速な社会変化を経験してきたが、近年では、エコツーリズムを中心とする観光産業もそのひとつの要因となっている。人びとが現金収入を得て、地域社会の生活が市場経済化するという影響はもちろん、地域住民は野生動物や自然環境との付き合い方も模索し変化させてきた。

また、1990 年以降、アフリカ諸国は急速な民主化を経験した。具体的には複数政党制および競争的選挙制度の導入を行い、その競争的選挙は様々な形で地域社会に影響を及ぼした。



写真 1 ケニア・タンザニアの国境を示す標柱。この地域のマサイの人びとは日常的に国境を歩いて超え、交流している

本研究が対象とする地域でも、以上のような急速な社会変化を 2000 年に入ってから経験してきた。観光ロッジが建設され、また地方分権化を押し進めるケニア政府の後押しもあって、競争的な選挙キャンペーンに熱が入っていった。

本研究は、これらの社会変化の中で人びとが営んでいる生活実践に焦点を当て、マサイの地域社会に見られる「政治・ポリティクス」やリーダーシップの特徴と、政治の動向から浮き彫りにされる社会動態を明らかにすることを目的とする。



写真 2 2000 年に建設された観光ロッジの遠景。概観が自然と調和するよう茅葺屋根が使われている。

フィールドワークから得られた知見について

今回のフィールドワークで行った調査は大きく 2 つに分けることができる。第一には、2010 年に制定されたケニアの新憲法、2013 年に実施された総選挙の当選者名簿、そして今回の選挙で大幅に書き換えられた選挙区の地図といった、行政諸機関によって発行された文書や、観光ロッジの元経営者陣がロッジの稼働期に作成した文書を収集して、事実確認の裏付けを行った。

第二には、調査対象地でリーダーシップの問題をめぐって人びとを積極的に扇動しようとする長老の家に住み込んで、その長老とともに聞き取り調査を行った。また、ほかの人びとと彼の駆け引きがどのようにして行われているか、日々の生活の中でどのような人間関係が構築されているかといったことに着目しながら参与観察を行い、人びとの営みを詳細に記述するように努めた。



写真 3 中央の人物が、現在長老グループの中心となっている人物である。この写真は彼が地方議会議員を務めていた 1997 年に撮影されたものである。

以上の調査から、人びとを扇動しようとする立場の指導者がとる戦略には、日常的に形成される親密な関係はもちろんのこと、出自（クラン）や世代にもとづく紐帯を巧みに利用し、極めて対面的・説得的に勢力を拡大する傾向が見て取れた。一方で、扇動される人びとも、ただ受身的に「扇動される」わけではなく、出自や世代にもとづく紐帯に言及しつつ、扇動しようとする指導者と駆け引きを行っていた。

また、わたしは調査を開始した当初、観光ロッジの利権や地方議会議員の議席といったような実質的な経済的権益をめぐって人びとが争っていると考えていたが、調査がすすむにつれて、人びとが会話をしている中

でボルテージが上がるのはリーダーシップをめぐる議論であることに気が付いた。つまり、誰が権益を獲得するのか、もしくはどのように自分の権益を確保するのか、といったことよりも、リーダーシップとはいかなるものであるべきか、そして、良いリーダーシップによる良いコミュニティ管理を実現するためにはどうすべきか、といったことの方がより重要視されていたのである。

今後の展開・反省点

調査地では、渦中の人物の一人である長老の家に住み込んで調査を行っていたため、ときとしてこの長老の敵方陣営から情報収集を行うことに苦労した。実際に資料として扱える精度の高い情報は、この長老陣営側から得たものに偏っていることは否定できない。政治的な事例を扱う上で、中立な立場での情報収集が難しい環境を作ってしまったことは反省点であるが、人びとの営みを内側から理解するためには、このような方法をとらざるを得なかった側面もある。

出自（クラン）や世代にもとづく紐帯を利用しているとはいっても、思いのほか柔軟に駆け引きが行われている。同時に、人びとは駆け引きそのものにある種の意義を見いだしているようにも思えた。言い換えると、必ずしも自分の利益を最大化するために、功利主義的に政治的な活動や駆け引きを行っているわけではないようであったのである。調査者が抱いたこのある種の意義とはいったい何なのか、今後考察を深めていく必要がある。



写真4 観光ロッジをめぐってコミュニティが二分されているがみ合う状況を解決するため、長老らが、木の下に人びとを集めて演説を行った。